

恋しくて、いつか逢えると
きまで (上巻)

みしまゆみこ

(三)

連休が終わって、もう三日も過ぎているのに、純ちゃんは どうして私に逢いに来てくれないのかしら・・・

「いくら、元気印の純ちゃんだからって、顔くらい、私に見せてくれてもいいじゃないの～」

「純ちゃんって、そんなに薄情もんだったわけ！」

体のあちこちが疼き、痛む、そんな時はいつも私は、わがままで、情けないブスな心がどンドン、エスカレートして行く、しまいには、自分でも思ってもいない言葉を、眼につくものすべてに、当り散らして、時には、カレンダーの美しき人（私の大好きな映画俳優だ！）にまで、恨み事を言っっては、泣きわめいてる！

ひとしきり、この儀式が終わって、我に返った時、私は途方もなく、落ち込んで、自分が嫌で、身ぶるいするほど、全身を傷つけたくなってくる気持ちをどうする事も出来ない！

自分の顔を誰かに見られたくなくて、布団を頭から覆いかぶり、徹底して、ダメ人間になるのが、入院して、しばらくは続く、いつものブスな心の私の姿・・・

今回の入院でもう何回目になるのかしら、かぞえるのも嫌だし、おっくうだわ～

いつもの事だけれど、私の腕はどうしてこんなに、注射針を拒否するのかしら、優しい看護師さんのいつものお話だと、私の血管はとても細いのだとか、朝に夕に、点滴をして下さる、看護師さんのほとんどの方が苦勞して、二～三度針を射しては抜き、又、射して、試し打ちをするたびに、痛いよ、痛いよ！

もう、その頃は、純ちゃんを恨んでいるは！

なぜ、今、ここにいて、優しくしてくれないのよ、薄情者！

ブスな私の心は、勝手に純ちゃんを独占してしまうの・・・

ハンサムで素敵な彼は、誰からも愛されて、好かれて、頼りになる人！

だから、私は、自分が情けなくて、苦しい！

独り占めしたい気持ち、ジュラシーがどンドン膨らんでしまう！

そして、私はベットの中で、少しだけ泣くの、いえ、大泣きしてるは心の中でね、でも、音もなく、近づいて来て、そと、私のおでこにキスをしてくれる人！

それが、優しすぎる彼！

「川喜多 純輔」

連絡もなく、突然、私のそばに来てくれる人！

言葉少なに、優しい微笑みで、私をつつんでくれる人！

(六)

毎日のトレーニングは、純ちゃんにとって、決して、らくで楽しい事ではないはずだけれど、本当に、純ちゃんは凄い精神力で頑張っている！

まだ、正式に、ハリウッド映画に出演出来ると決まったわけではなく、もし、純ちゃんの素晴らしい才能が認められて、ハリウッド映画の小さな役であっても、決まってから、仕事として、活動が始まるのは、たぶん、二年位先の話だ！

けれど、純ちゃんは、今、そのハリウッド映画出演のオーディションを受ける予定でいる！自分の俳優としてのこれからの生き方を賭けてみようと思心しての事だった！

国内では、さほど、俳優として名の知れた存在ではないけれど、以前、ある映画祭で出会った、ハリウッド映画のプロデューサーに声をかけられた事が、純ちゃんの頑張りをささえているようだった。

私は、今、純ちゃんの為に役にたつ事が何も出来ない！、それどころか、むしろ、純ちゃんの足を引っ張っているように思えて、つい、思い悩んでしまうけれど・・・

純ちゃんは、私の病室に来ては、小さなソファに、純ちゃんの長い足を折り曲げて丸めて寝ている姿を見ていて、私は、切なさとおおしきで、心が揺れるけれど、この瞬間がとても大切に、特別に幸せな時間だった！

「ここでの短い眠りが僕の楽しみなのだから、許してくれ！」

そう言って、私を見つめては、ちょっと、照れ笑いをする、笑顔がたまらなく美しい人！

その表情が、人間の心や感性の奥深さを感じさせて、私は、又いちだんと、純ちゃんの魅力に魅せられて、虜になってしまう！

あまり、仕事の事やトレーニングの事は、純ちゃんは話してはくれないけれど！、たぶん、私も、純ちゃんの薦めで、俳優（とは言っても、主に通行人の役ばかりだけど）ただ、純ちゃんのそばにいられることが、私には嬉しくて、重要な事だった。

今の「カコ」の大切な事は、病気を治す事だよ！

仕事は元気になればいつだって出来るから・・・

いつも、そう言って、私を元気づけて、励ましてくれる・・・

俳優なのに、純ちゃんは、私の前ではとても口下手になる、特に私の病気の事を話す時は、とても不安な表情になるのが、私にはとても辛い事だった。

奇跡的な出会いから、純ちゃんのお付き合いは、私に不思議なエネルギーを与えてくれて、とても元気になり、体調もとても良くなっていた。

ふたりで観た映画『オータムイン・ニューヨーク』は私にとっては思い出の深い特別の日になった。

以後も、度々、映画を観たり、日帰りの旅行をしたり、音楽会にも出かけた！

純ちゃんは、友人や知人が多く、そのほとんどの方が芸術家だから、いろいろなお誘いを頂くようで、その中から、私にあうものを選んで、いつも突然、私を連れ出す！

それは、常に私の体調を考えての決断だと言う事を、私は気づいているから、ただ、純ちゃんに申し訳なく、悪いと思いつながらも、嬉しく、感謝していた。

今日は、純ちゃんの友人で、ピアニストのK子さんのコンサートにふたりで出かけた、K子さんは、純ちゃんの高校の時の同級生だとか・・・

演奏された曲は、ショパンのノクターンを始め、ほとんどの曲が、私の大好きな曲ばかりで、純ちゃんは、その辺を考えてくれて、今日も強引に、私を連れ出して来てく

れたのだと分かり、胸が熱くなって、演奏も素晴らしかったけれど、私は、純ちゃんの心配りが切ないほど、嬉しくて感動し、感謝していた。

けれど、その、帰りのタクシーの中で、私の右胸が、しびれるような痛さを感じて、不安がよぎって、私はその怖さに耐えていた、やはり、その時が来たのだろうか・・・

(七)

純ちゃんとの奇跡的な出逢いから、私は恋におちて！、すべてが変わって、毎日が幸せだった！三十五年生きて来て、純ちゃんは、私のすべての価値感を変えてくれて、どんな小さくて、つまらない事であっても意味があり、その事をどう自分に活かせば良いかを教えてくれた。

私は幼い時から、病弱だった事で、ある意味、我がままに育ってしまったのかもしれない、又、成長する過程でのその時、その時の年齢にあった、世の中での、知りえる常識的な事にも疎かったし、どちらかと言えば、面倒で嫌な事を避けるような性格で、人間関係のトラブルなどは極端に避けて生きて来たのかも知れない。

純ちゃんの話す事がとても新鮮に感じ、そして、私には初めて知る物事や関心事もとても多かった。

だから私は、益々、純ちゃんを頼りにして信じて疑う事知らない純粋な想いと恋心で素敵さに魅せられて行った。

純ちゃんに逢うたびに、私自身も洗練された人間になれるような気持ちにさせてくれる人なのだった！

それは時に、感動的な喜びであり、又、自分の今まで、あまりにも常識はずれな人間であったのだと、恥ずかしくなる事でもあった。

けれど、そんな時ほど、純ちゃんは、私を傷つけるような事のない、気づかい、心配りが感じられて、かえって落ち込む事もあったけれど、それまでの私とは違って、直ぐに、前向きな考えになれる事が不思議だった。

「カコ」は長く病気をしていたのだから、知らなくても、恥ずかしくない！！
これから、少しずつ、一緒に考えたり、覚えたりして行けるんだからね！！
僕が少しだけ、早く生まれて、ちょっとだけしなくてもいい苦労したからさ～
「しなくてもいい？苦労をした？」

純ちゃんの事、何でも知ってるつもりになっていたけれど、又しても、はじめて聴く事だった。

純ちゃんは、俳優としての仕事の時の集中力は素晴らしいと私は思う、たぶん、並外れた気力と集中力は他の俳優の誰にも負けてはいないと私はいつも感動している。

けれど、時には、少年のような、あどけなさを持ち合わせていて、誰にも注目されていない時など、自然体で、素の純ちゃんは、何処か、不思議なほど、落ち着いたの無い仕草をしている時がある、その姿は、たぶん、純ちゃんの心がどこか異次元の世界を一瞬に旅をしているのかも知れない。

ふと、私は、そんな事を思ってしまう、不思議人！

『李 純輔（イ・ジュンホ）』と言う、素敵な人だ！

たった今、純ちゃんは、どこを旅したのかしら、心の旅を・・・

何も無い空間をみつめて、物思いながら、頬に美しい手を添えている、その姿が、私は大好き！

そして私は世界一幸せな女性だと、勝手に思っていた！

すぐそこに、悪魔が潜んでいた事も知らず・・・

私、カコは、今年の夏頃から、体調が悪くて入院したけれど、もうひと月が過ぎても、いっこうに快復しない、私の病気は、子供の頃から、原因が分からないけれど、ある

とき、極端に免疫力が低下する、主に初夏の頃に起きる事が多かった。

体全身の働きが悪くなる、アレルギー性の痒みがひどくなり、風邪を引きやすくなり、又、よく熱を出しては中々下がらない、胃や腸の働きが悪くて、胃もたれや不快感に

悩まされる、食欲無くなり、食べられない為に、体力が無くて、結局は病院に入院して、点滴をする事になる、何度も、この繰り返しで、私は三十五年生きて来た人生だった。

けれど、純ちゃんと奇跡的に出会って、恋をして、私はこの五年間はほとんど、入院せずにいられた、確かに、体調の悪い時もあったけれど、不思議なほど、直ぐに元気になり、父の営む、印刷工場の事務を手伝いながら、純ちゃんの誘いで、俳優と言うのには気恥ずかしいけれど、何度か、映画に出演した。

けれど、私の名前は、誰も気づいてくれるような場所にはなく、いつも、その他大勢の中に、小さく載っている、そんな位置だったけれど、私は本当には、特別に幸せな五年間の日々だった。

(八)

仕事のない日は、純ちゃんと、ドライブをしたり、又、時には、自転車ロードを風を切って走る事もあった。

私は、生まれてから、ずーと、埼玉県の飯能に住んでいた、だから、純ちゃんも、所沢に越して来てくれた。

そのほうが、ふたりのデートには、都合がよかったし、仕事にも、さほど、不便さを感じなくて暮せていた。

時には、純ちゃんは、脇役であっても、とても重要な役を演じたり、又、地方への長期のロケがある映画にも出たりと、純ちゃんは、派手なスターと言われる、俳優ではなかったが、仕事は切れ目なく、続けられる幸運さがある人だ！

それは、紛れも無く、純ちゃんの日々の努力のたまものであった。

時には、ストイックなまでに、役柄を研究して、役柄の人物になりきる努力、そして、その人物に徹底して、感情移入できる集中力は本当に凄いものだと、私はいつも感動して観ていた。

私は、そんな純ちゃんの良い努力し、研鑽する姿を見ていると、自分の甘さや我がまま、努力の足りなさを痛切に感じながらも、自分では、どうする事も出来ない事がはがゆい思いと、才能の違いを見る思いで、やはり、落ち込んだりもするが、ある部分で、純ちゃんのそばにいられて、素晴らしい才能の輝きを観ていられる事に感謝せずにはいられない思いになった。

私が入院して、ひと月が過ぎ、九月の大型連休、「シルバーウィーク」も過ぎた、ある日、純ちゃんは、私に何か言いたげなそぶりをするけれど、落ち着かない仕草をしては・・・

「カコ、病院暮らしは、辛いよね！」

「カコは、偉いよね、毎日、毎日、点滴に繋がれての生活だもの・・・」

「カコ、あのね！カコ！ちょっとね！」

そう言ったまましばらく黙ってから、今から、仕事だから行くね・・・

なんとも、気になる、純ちゃんの様子！、同じような事が二～三度繰り返してあって・・・

「カコ、いつ頃、退院出来るのかな～」

「一緒には無理でも・・・」

私は、純ちゃんが、何か、いけない事！、私に対しての裏切り！、何をしたのかしらと、邪推した！

(九)

純ちゃんは、至極健康で、誰が見ても、私のようなブス女を恋人にしているのは、不平、不満や、やっかみごころを抱いても当然だと思う！

純ちゃんはとても素敵な男性で！あの美しく微笑む姿は嫌味のないセクシーさに魅せられてしまう女性が多く、黙っているわけも無く、きっとほおってはおかないだろうし、誘惑も多いはず！

私は、いやな醜い、ジィラシーが、どんどん、悪い方向に膨らんで行く事の自分の心のいやしさに耐えられずに、気分が悪くなって来た。

純ちゃんは、何か言い出しにくそうに、落ち着かないそぶりが、よけいに、私をブス女にして、私は、勝手な思い込みをしている。

「純ちゃんの裏切りだと決め付けて、ベットで寝たふりをして、純ちゃんに背中を向けて、すねていた！」

しばらく、純ちゃんは黙ったままだったが！

「カコ、こっちを向いて！」

「カコに大事な話をしたいから・・・」

「僕さ、ちょっと、言い難くて、ちょっと恥ずかしいけど！」

「しばらく、旅に出ようと・・・」

「だから、カコ、ちゃんと聴いてくれる！」

私は、益々、不機嫌になり、純ちゃんの顔を見たくないと思った。

たった数分の沈黙でも重苦しい、とても長く感じた時が過ぎ頃、純ちゃんは、そっと、私に触れて、優しく、私を、自分のいる方へ体のむきを変えてくれて・・・

「ゴメンね、驚かせて！」

「今度、仕事で、ひと月ほど、アラスカに行く事になったよ！」

「カコは気に添わぬだろうけど、僕はとてもやってみたい仕事なんだ！」

「ある、写真家の、生き方や考え方を追いながら、私なりの彼の魅力を紹介する、ドキュメンタリー番組の企画で、私も企画者のひとりなのだよ！」

「長く、アラスカ大自然に惹かれて、アラスカに住んでいる日本人でね！」

「アラスカの原住民と生活を共にしながら、動物の写真を撮影しているけれど！」

「アラスカの大自然を純粋に愛している人で、私はその人を、とても尊敬している！」

「だから、どうしても、会ってみたい人なんだよ！！！」

私の知らない純ちゃんの優れた人間性を見た気がして、とても嬉しかった、改めて、まだ、まだ、私の気づかなかった素敵な純ちゃんが、今、私の目の前で、あの素敵オーラの渦が虹色に輝いていた。

そして、私の体をそっと抱き起こして、私の両手を取り、指輪と薔薇の小さな花束を手渡して・・・

「ぼくが、アラスカから帰る時まで、考えてほしい！」

「こんな僕でよかったら、結婚してほしい！」

「僕は、たぶん、大スターと言われるような俳優には成れないと思うけれど！」

「カコ、君が、居てくれたら、俳優という仕事を、一生努力して、やって行けそうだよ！」

「この、僕には、どうしても、カコが支えてくれる力が必要なのだよ！」

「僕は、意思が弱いから、カコが励まして、背中を押してくれないとダメなんだよ！」
そんなふうに、一方的に、話して、「今日、まだ仕事があるから、行ってくるね！」と、私は、話も出来ない！何も答えられない！そんな時間さえ与えずに、急ぎ足で、出かけてしまった・・・

そのあつく熱せられた空間の中に、ひとり残された私に、今、何が起きたのか、直ぐには理解出来ないほど、混乱して、胸の鼓動が苦しくなるほど、驚きと喜びに、ベットの上で飛び上がりたいほどの、気持ちになっていた！

(十)

純ちゃんの突然の告白が、夢の中の出来事だったのではないかと、信じられない思いに不安になっては、純ちゃんの話してくれた言葉を、ひと言、ひと言、思い出し、確かめながらもなを、気持ちは喜びと混乱した不安がよぎる。

私は世間で言う「コンカツ」を急がなくては！のお歳頃なのだが、幼い頃から、病氣ばかりして来た事で、見てくれがこどもぽくて、頼りない人間だ！

こんな私の何処を純ちゃんは好いてくれるのだろうか？、美人でスタイルも良いというのであれば・・・そんな自信のない自分の心がうろたえていた。

あの告白した日から、もう、三日も、純ちゃんは、来てくれない・・・

病室の無機質な空間が、突然、嫌で嫌で、たまらなく何処かへ行きたくなる感情を抑えて、気持ちを落ちつかせることは結構大変で苦しいもの・・・

眼に見えない鎖で繋がれているような、閉塞感の囚われるびと的な気持ちになる！

そんな、ある日、実家の両親が、珍しく、病室に現われた。

私は何度も入院している為と、今は両親ふたりだけで印刷工場をやっているような状態で、仕事もあまり多くないし、たまに頼むアルバイトの学生も、休みがちだから、時間が取れないと、笑いながら、母は言うてごまかしていた。

やはり仕事が少なく、経済的にも大変なのだろうと思うと入院費の事では迷惑をかけている事が心苦しい・・・

そんな気持ちを隠して、私は、可笑しくも無い下手な冗談を言っは、お互い、気まぐずい苦笑いしていた。

両親の様子から、そんな、冗談めいた話で来たのではない事が、私には、分かっていた。たぶん、入院費がかさむ為に、そろそろ、退院して欲しい！

そう言われるのだとばかり、思っていたら・・・

「あなたは、純ちゃんと結婚する気持ちがあるの？！」

いきなり、びっくりする言葉で、一瞬、私はうろたえたけれど、このような問いを心のどこかで期待していたような気持ちがあった。

「え！、何！、誰から、聞いたの！」

その事を言うのに精一杯の気力だった。

両親の話だと、純ちゃんは、五日ほど前に、突然、家を訪ねて来て・・・

挨拶もそこそこに、いきなり、言ったそうだ！

「夏湖さんと結婚させて下さい！」

「僕には、夏湖さんが、これからの生活でどうしても必要な人です・・・」

「結婚する事を許していただけますか？」

「病気の事も体の事もすべて、私が全力を尽して、頑張るつもりです！」

「不安に思われるでしょうね、私の仕事や、収入も不規則だし！」

「家に居られない事も多いですが！」

「もし、もし、許して頂けるのであれば・・・」

「ご両親と一緒に住んでも良いかと考えています！」

「そう計画しているのですが・・・」

やはり、私に言った時と同じように、純ちゃんは、父と母に、伝える事だけ話して、さっと、急ぎ足で帰ってしまったと、両親は私にその時の純ちゃんの様子がとても可

笑しくて、かわいい笑顔だったと言って笑って、両親は機嫌が良かった。

純ちゃんは、本当はとても照れ屋さんで、自分のことになると極端に口下手になるところが私は好感を持てる存在だった！

映画やドラマでの役の上ではどんな恥ずかしい言葉も言える人ですが、いざ自分の事になると、俳優ではなく、極めて、生真面目な人間として、あまりのギャップがあることが不思議だった。

私は、病気がちな体だから、両親が心配する事は充分理解出来る、私自身が結婚を現実の事として考える事ができない！

ただ、純ちゃんの言葉が嬉しくて、幸せだった！

(十一)

私の体は、いつ、どんな風に体調が悪くなってしまい、純ちゃんに迷惑をかけてしまうのかが、まず、最初に浮かんで来た。

確かに、純ちゃんとの夢として、ふたりで愛し合いながら、一緒に暮せたら、どんなに幸せで素敵な事だろうと、思い、夢見た事も何度かあったけれど、それはあくまでも、夢の中での事なのだ、無理やり、知らず、知らずに、自分に言い聞かせていた事だった。

三十五年生きて来た私の人生の中で、何度、病院へ通い、入院生活をして来たのだろうか、かぞえる気にもなれないほど多かった、確かに、幼かった頃と比べれば、成長と共に体も元気になって、それほどの欠席もせずに、短大を何とか卒業出来た。

そして、外の会社へ就職こそしなかったけれど、父が営んでいる印刷工場の事務を手伝いながら、やってみたい事や学びたいと思う希望や目的が出来た時は気楽に始めて、時には無駄にしている事もあったりと、そんなふうにして、三十歳近くまで、なんとなく、病気の事以外はたいした苦勞もせずに、ひとりっ子の私は両親の保護のもとで大事にされて生きて来たような気がする。

そして、純ちゃんとの奇跡的な出会いが私『杉本夏湖』のすべての価値観や物事、生きる世界が変わって、感情が豊かになり喜びも悲しみもより深く受け止められるような人間に成長させてくれたのが純ちゃんの存在だと思えるのだった。

純ちゃんとの恋する日々は、私の体の中で、息づき始めた、魔物さえも、戸惑わせるエネルギーや細胞が活発に働き、私は、一時期は本当に健康そのもの、楽しくて、幸せな時間を過ごしていた。

五年間は、免疫力も高まり普通の人と変わりのない日常が送れていた、確かに、少しだけ体調を崩しても、入院する事も無く過ごせていた、今年の夏の終わりまでは・・・

アラスカへ取材の仕事で出かける前に映画出演の仕事を数日で済ませて、帰って来て、真っ直ぐに、私の病室に来てくれて・・・

「カコに、おみやげだよ！」

純ちゃんは仕事から、地方へ出かける事も多いので、おみやげを買って来るのは「私が止めて！」と言って、「純ちゃんが無事に帰って来てくれる」ことが、一番嬉しいのだからとお願いしていた事だった。

純ちゃんと私は心の駆け引きなどする必要の無い間柄で、常に本心で話す約束しての事だから、おみやげを買って来てくれる事は珍しい事だった。

小さな木彫りでひまわりの花の形のブローチだった、私の手に渡しながら・・・

「もう、北海道の山は、雪が降ったよ！」

「初雪だと、地元の人が言ってた！・・・」

「いつも年よりもかなり早いそうで、今年の冬は寒さが厳しいそうだよ・・・」

アラスカから帰ったら、直ぐに又、今撮影してる映画のつづきで、北海道に行くけど、なんか、忙しいな～、

純ちゃんは、独り言のようにつぶやいていた。

その数日後、あわただしく、純ちゃんは一人で、アラスカへ出かけて行った。

九月の中旬だというのに、アラスカはすでに秋も深まっていて、アンカレジの町では雪景色になっていたが、元々、夏の季節でさえも、一日のうちに四季があるほど、天

候がめまぐるしく変わるところで、今の時期に降る雪はさすがに、冬の根雪ではない
為に、街中では雪は直ぐに消えていた、夕暮れもとても早い！

「李 純輔」ははじめてのアラスカにいても、心の片すみでいつも「杉本夏湖」を感じながら・・・

けれど、ひとたび、仕事に熱中し、集中力を高めた時、すべてのエネルギーを注ぎ仕事に取り組んで忙しく時間が過ぎて行くのがとても早かった。

「カコ、ゆっくりとお休みして僕の帰りを待っていてくれ！」

(十二)

季節は秋から冬にかけてのこの時期、特に天候が悪い日が多いのだと、アンカレジの空港まで向かいに来てくれた、これからアラスカの地で何かとお世話をしてくださる日本人で、アンカレジの大学院で「極地気象学」を長い間研究をしている「伊達聡介」さんがそう説明してくれた。

伊達さんは、この取材の為にとても多くの助言や手助けをして下さり、素晴らしい方にめぐり会えた幸運に感謝したい。

予定していた、極北の町、バローへは飛行機が飛べなくて、諦めなくてはならず、とても残念だったが、純輔の尊敬を抱く人と共に過ごせる事が、大きな喜びだった。

「李 純輔」の敬愛する「高津紳一郎」は医師でもあった！」

もちろん、動物写真家としての活躍は、誰もが知る事だけれど、長いアラスカでの生活の中で、多くの矛盾を感じている事もあるとも話してくれた。

アメリカ合衆国の中で、アラスカ州は、石油が出るために、多くの土地を、理不尽な開発を進めて、「エスキモーの人たちやアラスカインディアンの人たちなど」大昔からそこに住み、生きて来た人たちを立ち退かせて開発を進めた。

その事で生活を保障する為、アメリカ政府は、そこに住んでいた人たちにお金を渡す事になり、その保証金によって、仕事をする事を忘れてしまい、アルコール中毒や麻薬に手を染めてしまう者が多くいる事が、心が痛むのだと語った。

確かに、アメリカと言う国は、自由で、恵まれた国だ！

わずかな期間での取材ではあるけれど、多くの事を見ても、安易にまとめる事は難しいけれど、大自然の美しさの影に、又、世界一の経済大国の今を守る為に、光り輝く裏側には、救いようの無い犠牲者の姿が隠されていた事を知って、純輔は複雑な思いになった。

高津さんは、アラスカエスキモーや現地の人々の生きる場所と引き換えに受け取った保証金を使い果たし、生きる事の迷いから、薬物やアルコールに依存して、行き場をなくした人々を救うボランティア団体の手助けを医師として出来る事をしていると話していた。

アラスカに憧れて、大好きなアラスカに住んでいながらも、矛盾を感じて心が痛む事もあり、人が生きて行く難しさを感じているとも語っていた。

アラスカでの最後の日は高津さんのお宅にご招待を頂き、フェアバンクスの町から少し離れた、静かで、深い森の中に、たった一軒だけのお宅で、アラスカインディアンの原地の女性とご結婚されて、おふたりで暮していた。

奥様の手料理をいただきながら、二人で、お酒を酌み交わしながら、たくさんの貴重な話を聞かせて頂けた事が、純輔は、とても感動し、言い知れぬ思いになった。

特に、今、現在も、人のすむ街から遠く離れた森の奥に住んでいる、一人の日本人女性の開拓者精神を貫きながら、ある意味、冒険的な暮らしをしてる五十代の女性いて、とても素敵な生き方の話を聞いてみて、とても驚きと感動でお会いしたい人だと強く感じた、素晴らしい話だった。

今頃の時期は夕暮れも早く、ここの森は街明かりの届かない、暗く深い森の中にある！だから家の庭からでも、オーロラを観る事が出来るのだが、今年は天候が不順で、とても寒い日があったり、そうかと思えば真夏のような暑さと長雨で、生活が大変だよ！と高津さんは笑

いながら・・・「オーロラ、観せてあげたかったな～、本当に残念だよ！」
といいながら、高津さんの写したオーロラの写真をプレゼントしてくれた。

「オーロラ銀色の虹 天空をうねりながら」

「君のいる街へ届け 光の橋をわたる彩りの舞」

(十三)

忙しく過ごしたが、高津さんや伊達さんと過ごせた、アラスカでの日々が、忘れられない貴重で、純輔のこれからの生き方に大きく影響を与えてくれる、素晴らしい体験が出来たと感じ、感謝の気持ちで純ちゃんは日本に帰国した。

だが、この高津さんとの出会いが、純ちゃんの人生が大きく変わってしまうほどの大変な出来事が待っているとは、その時の純ちゃんにも、私、カコにも、全く、気づいてはいなかったし、予測も出来るような簡単な事ではなかった。

純輔の大きな目的だった、アラスカの極北の町、バローをたずねる事が出来なかった残念さは残ったが大きな心の財産が得られたと思える旅だったと、純ちゃんは、少年のような純粋さを見せて、興奮気味で、次々と私に話している姿を、私は新鮮気持ちで新たな感覚を発見して純ちゃんを観ていた。

アラスカから帰って直ぐに、北海道へのロケに出かけて数日後、やっと、時間が出来たと言って、嬉しそうに、私の病室を尋ねて来てくれた。

純ちゃんはまだ、アラスカでの体験した感動が覚めやらぬかのように、珍しいほど、饒舌に、ひとしきり話して、気持ちが落ち着いたのか、又、旅の疲れなのか、いつものように、この病室の小さなソファに、純ちゃんの長い足を折りまげて、丸くなって寝ている姿、純ちゃんの無防備さは香しさと愛しさと切なさを感じて、その純ちゃんのどんな演技よりも、カッコイイ姿だと思える私の大好きな姿だ！

強い愛情と幸福感はすべての考えや現実を見ない盲目的なまでに狂おしい感情の高まりを抑えられずに、私の動きの悪い体で、嬉しさと安堵感と切ないほどの感情が揺れ動いて、そして悲しみ広がっていく心を包んで涙が流れた。

いつの間にか、私が気づかぬうちに、純ちゃんは目覚めていた。

純ちゃんは、落ち着かない雰囲気、私の顔を節目がちの美しい瞳で微笑みながら私を見ては、次の動きをどうして良いのかが、分からない！、そんなふう、無意味にからだを動かしては・・・突然！

「カコ！どうする！、」

「僕を拒否しないよね！」

「僕には、カコ！絶対に、必要なんだよ！」

「カコがそばにいてくれるだけでいいんだ！」

「僕～さあ～もうこれ以上は～待つのは嫌だよ！」

まるで、照れ隠しのように、そう言って、すぐに、忙しく、病室を出て行ってしまった。

私は、何も話せず、応えようがない、ただ、理解出来ない不安が、体の奥のほうから感じた気がした。

それから、毎日のように、純ちゃんは、私のそばに来てくれる、仕事が終わると、どんなに遅い時間であっても、ナースセンターを避けて、誰にも見つからないように、そーと、部屋に入り、音も無く、私のベットの脇で、しばらく私の顔を見ていて声もかけずに又そーと帰って行く・・・

ただ、私のそばにいて、私の顔を見つめる！

時には、そっと、私のおでこにくちづけをして、そして、私に唇を重ねて、耳元で言葉を囁き去って行く純ちゃんのカッコ良さで私は体を熱くする・・・

私は、今、病気でこんな状態だから、自分からは、どう返事をして良いのか分からないのが、不安で真実の気持ちだった。

結婚を夢見る事は、とても幸せな気持ちだけれど、健康で、非のうちどころのない男性の純ちゃんの妻として、私は、ふさわしい人間ではない事が、誰が見ても分かる事だった。

私の両親も同じ考えだったから、こちらから、どうすればいい・・・

「結婚」

私はこの言葉を言い出せず、想いだけが深くなり、時間だけ虚しくが過ぎて行った。

(十四)

いくら、口下手な、純ちゃんでも、カコが何の答えも出さずにいる事に心が乱れて、気持ちの抑えようがなくもう限界だったようで！

「カコ、この前、渡した指輪を返してくれないか！」

「カコは、ぜんぜん、返事してくれないから・・・」

「僕が決めるよ！」

そう言って、病室の窓べに立って、純ちゃんは、大きく深呼吸してから、私が手渡した、指輪を受け取った。

その次の瞬間！、純ちゃんは、いきなり、私の左手を握り！

「薬指に、僕が指輪をはめて上げる！」

「これが、僕の、君への想いだから！」

「僕は、何があっても、カコと結婚する！」

「だから、カコはそのつもりでいて・・・」

「絶対に、この指輪をはずさない事！」

「僕とカコの約束だからね！」

そう言って、私を抱きしめて、そして、頬にキスをして、静かにそっと、ふたりは、唇を合わせた。

その瞬間、ふたりの真実の愛を確かめあった！

純ちゃんは、私にひとことの言いわけの言葉をする事も許さずに、優しく、抱きしめたままで・・・

「もう、何も心配せずに、僕に任せてくれるね！」

「これからはいつも、一緒にいよう！」

「辛い時も、君の痛さを受け止めてあげるから・・・」

「苦しい時、悲しい時、我慢せずに、僕の胸で泣いていいんだよ！」

「そして、僕を、支えてくれればいい！」

抱きしめてくれる、純ちゃんの美しく鍛え上げた厚い胸の力強さ、すこし痩せたのか、ふと、見てしまった、隆起した太い喉仏がまれに見る男性の肉体の美！今の私には、

眩しくて、少し苦しかったけれど、何か不思議な力が、私の体に伝わって来たように、何もかも忘れられた、幸せと喜びに涙があふれて止められない、純ちゃんに気づかれ

ないようにうつむきながら、すこし、恥ずかしい想いと女としての喜びを感じて・・・

私のみじかい生涯の中で一番幸福で、心が喜びにあふれて、今、見えている世界が美しく、虹を描くように、こんなにも素晴らしく素敵に感動出来る瞬間があった、あの時間を忘れる事が出来ない！

私の感情と体と血潮は燃えるように熱い流れを感じた。

純ちゃんの行為は、私に強引なまでのプロポーズをしてくれる情熱！

どんな病でも純ちゃんの熱情とエネルギーによって、退散せざるを得ず、あの日、純ちゃんから受けた不思議な力は、しばらくして、私の体調はどんどん快復して病院を退院する事が出来た！！！！

それはまるで、純ちゃんからのエネルギーが私の体に注入されたように、不思議なほど元気に、心も体も健康になったと実感出来る、そう感じる事でした。

あんなに、体じゅうが重くて、痛くて、鉛が私の全身を覆い尽していたように、なんの感覚も無い、もう、これ以上は吐き出す物がないと思うほどの苦痛や疼きと全身を這い歩く痒みが不快感で気が狂いそうなほどの辛さが無い！

「やはり純ちゃんは、私の守護天使なのではないですか〜」

(十五)

そう思えるほど、私「杉本夏湖」には心にも体にもたくさんの奇跡を与えてくれる特別で素敵な人なのです。

私を守ってくれる守護天使の名前は『李 純輔（イ・ジュンホ）』

けれど、直ぐには、結婚出来るほど、今の私にはたやすい事ではなかった。

純ちゃんは、男一生をかけられる仕事として俳優を選んだ、だから、その為の大きな目標である、ハリウッド映画出演の為の書類審査が通り、ロサンゼルスで、一次、二次、の、オーディションがあり、アメリカへ行く予定が近づいていた、その為の滞在期間が、果たしてどの位になるのかが、はっきりしていなかった。

もちろん、純ちゃんは、海外で仕事をする為の契約している選任のマネージャがいるわけではなく、アメリカでの予定はすべて、純輔自身が進めていく事になる。

日本での仕事であれば、契約しているプロダクションがあるけれど、友人の俳優が、社長兼俳優という、小さな事務所だから、もちろん、ハリウッドへの挑戦は、賛成はしてくれていても、現実には、純ちゃんの手助けを出来るほどの組織ではなかったし、経済的にも、事務所がすべて応援できるほどの良い経営状態ではない事が、純ちゃん自身が良くわかっていた。

純ちゃんが、所属している事務所の社長は、純ちゃんが新人の時に、出演した映画『美しき人の海』で演じた、「純朴な田舎の青年」小さな役だったが、俳優としての才能にほれ込んでいた。

純ちゃんが所属している事務所の社長は、少しだけ、俳優としてのデビューが早く出来た友人の「佐木優作」が立ち上げた事務所で、純ちゃんを支援してくれている、男気のある豪快な人だった！

もう十年以上も前の事だけれど、純ちゃんが俳優としてデビューしても直ぐに多くの仕事があったわけではなかった。

経済的に難しい時でも、純ちゃんの才能を認めてくれていたので、よほどの事が無ければ、アルバイトをせずに、俳優としての準備をするようにと言って、最低限の生活の保障をしてくれた事で、贅沢は出来なかったけれど、つつましい生活の中で、たくさんの演劇や芸術の本を買い、読んでいた。

時には、アパートの大家さんが、冗談のように言ってた！

「全く、この部屋は、本の重みで、かたむいちゃうよ！」

「早く、引越するか！」

「純輔くんが大スターになって、このボロアパートを買い取ってくれなきゃね！」

「それを、楽しみに待ってるんだから！」

「この家を大豪邸に建て替えておくれよ！」

気さくで、粹な、大家さんのいつもの口癖だったそうだ！

私と出会ってからは、所沢の小さなマンションに越して来ても、とても、寂しいと言いながら、「応援してるよ！」、見守ってるから、頑張るんだよと、何度も言って、名残惜しそうだったと聞いている。

純ちゃんは、自分の家族の事や故郷の事をなぜか、あまり話そうとしなかった、けれど、その心の中では寂しさを隠しているようで、カコは気になっていた。

だから、私の両親は、少しでも、純ちゃんの寂しさがまぎれるのであれば、親代わり

になりたいと、言葉には出さなかったけれど、私の両親は気づかっていた。

ただ、時々、極まれに、実家があると聞いている、住所から、心温まる贈り物が届いていた。

私はまだ、一度も、ご両親に会わせてはもらえなかった、けれど、あえて、純ちゃんは言葉にして、私に説明があったわけではない！、私は純ちゃんをご両親の事を自分から話してくれる時期が来るだろうと思っている。

今は、純ちゃんの愛を信じて、私はすべてをゆだねたいけれど・・・

(十六)

私自身が、純ちゃんと結婚出来る人間ではないと心の中で、いつも、思っていた事だから、純ちゃんのご両親やご家族に会えなくて、当然なのだと思っていた。

純ちゃん自身から、故郷の実家に帰るとか、帰郷したと言う話は、私とのお付き合いを始めてからは、聞いた記憶が無かった。

けれど、純ちゃんと私がもし結婚する事になれば、否応無くご実家との連絡やご家族とお会いせずにはいられない現実がある。

その事で、純ちゃんの「結婚相手」が、こんな私で良いだろうか！、漠然とした不安が広がって行った・・・

純ちゃんは、今、ハリウッドへの出発準備と国内での仕事のスケジュールが一杯で忙しい状態だった。

毎日、必ず、時間を見つけては、電話をしてくれて、声だけは聴いていても、結婚への準備を始める事が私は出来なかった、だから、私は、純ちゃんに提案した！

「純ちゃんとの結婚をお受けします！」

「けれど、今は、純ちゃんは、ハリウッドへの準備を優先しましょう」

「ハリウッドでの出演が決まった時に！」

「私も一緒に行けるように！」

「元気で、健康な体になれるようにします。」

「だから、今は、私の事を考えずに！」

「仕事やハリウッドへの準備に専念してください！」

そう言って、純ちゃんに納得してもらいながらも、気持ちの何処かで、純ちゃんへの裏切りのような、不安と居心地の悪い、不思議な感情が、常に私につきまとっていた。退院は出来たけれど、私の体のどこかで、嫌な何かが棲みついているような気分がいつもしていて、落ち着かない感情が揺れ動いてしまう！

まるで、私の心と体がガラス細工の置物のように不用意に触れてはいけないような危険感があるように思える嫌な感情だった。

相変わらず、純ちゃんからは定期便のように電話は、何度もある！

ひとりで旅立つ事の不安感があるのか？・・・

「カコも一緒だったらいいんだけどな～」

純ちゃんにしては珍しく、愚痴も言ったりして・・・

もう何年も前から、英会話を話す機会を多く取り入れるなどして準備していたが、やはり、すべてが英語で話し通す事はかなり苦労があるようだった。

幼児期から身につけてしまった母国語の言葉の感性を入れ替える事はそうたやすい事ではない！

そんな時、私が健康で元気な体であったなら、何かしら手助けが出来るのだろうと考えては、悲しい思いで苦しく、申し訳なさで、気が滅入る自分が又なさけなくなる。

そんなある日、純ちゃんからの電話で！

「今、飯能の駅に着いたけれど、迎えに行くから、時間が無いので、出かける支度をして待っていて！」

「ごめん！、いつも急がせてばかりで！」

「今日は、カコのご両親はいる！」

そう言って、純ちゃんからの電話は切れてしまった、何があったのかしら？

今から我が家に来て、直ぐに出かける？

行き先も言わずに、切れた電話を手にしたまま、しばらくは何をどう準備して良いのか、鈍感な私は思いつかなかった。

ふと、純ちゃんの御両親に！そんな思いもしたけれど、その事であれば、きちんと話してくれるはずだし・・・

「出かけるから！」

確か、そう言ってた！じゃ～何処へ行くの？、着ていく服をどうすればいいの・・・

短い間に、思い悩んでいても、考えがまとまらず、時間はあっという間に過ぎて行く、気ばかりが焦って、何も決まらない！

愚図な私の情けない姿に、母はただ、急いで、急いでと急かせるばかりで、どうしてこうも親子でダメな女なのかしら・・・

(十七)

そして、純ちゃんは十分くらい過ぎた頃、家の前まで走ってきたようで、息を弾ませながら、玄関の扉を開けた。

そして、真剣な眼差しで！私の両親の前で正座をして、挨拶をしてから、急に改まった表情で・・・

「お父さんお母さんにお願ひがあります！」

「すみませんが、今日は、夏湖さんを、責任もって、お預かりしたいので、お許しください！」

「あす、僕、アメリカに行きますので、今日は夏湖さんと一緒に過ごしたいのです！」

「ただ、一緒にいただけです！」

「気をつけて、大切にしますから！」

「今日、泊まる場所は、所沢の駅前のパレスホテルです」

「あすの朝には、家にお送りしますから・・・」

「あすは、成田までは、僕ひとりでいきますから、もう、荷物も送りましたので・・・」
そう、一方的に話して、両親が何も答えられずに混乱した、落ち着かないようすで、

「すみません！、すみません！驚かせてしまいましたが！」

そう言って、はにかむような、微笑む笑顔が、とても美しいと私は、ただ、純ちゃんをみつめていた！

これから過ごさだろう時間は純ちゃんにすべてをゆだねて！！！！

どんふうに純ちゃんが私に接してくれるのか、まるでぼんやりとした絵画を見るような？、それでいて、瞬間的に想い描くふたりの姿！はつきりとした何かを考えられるほどの恋愛経験の無い私は、純ちゃんのこんな表情をする姿が、私はたまらなく好きで、恋しくて愛しさを強く感じてしまう、そんな瞬間だった。

「純ちゃん！、私、貴方の奥さんになれたら、どんなに幸せな事でしょう・・・」

そんな想いを心で伝えながらも、私のこの胸の奥で疼く痛みがなんなのか・・・

今、私はこんなにも幸せで心が震えてしまうほどなのに・・・

両親は、「ダメだ！そんな、非常識な事！、を許せると思うか！」

たぶん、心の中では、そんなふうには言っていたと思うけれど、私や淳ちゃんに対して、何も言わずに、嫌な顔もせず私を送り出してくれた。

私は純ちゃんの励ましで体調が良くなって、退院したとはいえ、病気が治ったわけではない！

又いつ、体調が悪くなるか分からない、不安な私の気持ちを察してくれた両親の配慮が嬉しかった。

純ちゃんは、自分の車を持たないから、殆どが、電車やバスを使うけれど、今日は私の事を気づかい、私の家から、所沢のホテルまでタクシーを使った、今は、少しでも節約し、アメリカ滞在に必要な時だから、私の為だと言う、申し訳ない気持ちとありがたい思いで揺れていた。

純ちゃんは、今、ハリウッド映画のオーディションを受ける為にアメリカへ行く！お金はとても大切に使わなくてはいけないのに、アメリカ滞在が果たして、どの位の期間

になるのか？

二次、三次と、そして、最終に残れる自信はあるのだろうか、大体の計画づくりを考えて、国内の仕事を入れずに、一定期間は無収入になるわけだから・・・

そんな事を私は、ちまちまと考えていたし、アメリカでの生活がどんなものになるのかが、私には想像もつかなかった、ただ、不安な気持ちと、混乱する今、現在の状況が、わけの分からない興奮と、緊張した感情が小刻みに揺れている自分の心がと体が緊張

して、ふらついてしまい、めまいがする、胃の痛みがすこし、痙攣してるように・・・

どうしてこんな時に、こんなに幸せな時間だというのに、私の体は無慈悲にも私の心情とは裏腹な動きをして、私に意地悪してる！

「ごめんなさい、純ちゃん、こんな私を愛してくださり・・・」

「とても嬉しいし、幸せなのよ、貴方について行きたいわ～」

「何処までも、貴方の心が、嬉しい！！！」

そんな想いが繰り返し、繰り返し、浮かんでは、揺れ動く心・・・

(十八)

通り過ぎて行く街の風景も、私にはただの風の中に消えて行く景色にしか見えないし、眼にとめられないほど、緊張と混乱の中で、車窓を見て、何かを考える気持ちの余裕さえなかったのだと思う。

家を出て、どの位の時間をタクシーが走ったのかさえも分からないままで、ホテルに着いた。

気がついた時、私は、純ちゃんの後をよろけそうになりながら、ついて歩いていた、私のそんな姿を見て、純ちゃんは私に駆け寄って来て私を支えながら・・・

「ごめん！驚かせてしまったね！」

「今日一日は、僕にすべてを任せて！」

「僕に甘えてほしいんだよ！」

エレベータを降りてからも、ゆっくりと歩きながらそんな言葉で話しかけてくれた。そして、いきなり私の腕を取り！部屋の扉を開けて、私を抱き上げるようにベッドの上に運んでくれて、そっと寝かせてくれた。

そして私の耳もとで囁いた！

「疲れただろう！」

「すこし、お休み、僕は隣の部屋に行ってるから・・・」

そう言い、部屋を出て行った、純ちゃんの後姿はなぜか寂しげに見えて、私は心が痛かったけれど、私の気持ちは少しだけ気が楽になり、ベッドを這うようにして、靴を脱ぎ、少し、眼をとじて、からだを休めるしかなかった。

隣の部屋で待っている純ちゃんは、何度か、音を立てずに、そっとドアを開けて、私の様子を見ていたようだった。

どの位の時間、私は休んでいたのか、やっと浅い眠りから覚めると、純ちゃんは、私が寝ているベッドの横で微笑みながら・・・

「姫はお目覚めでしょうか！」

「僕はとてもお腹がすきましたが！」

「姫は大丈夫でしょうか？」

「そろそろ、起きていただけましようや、姫！」

「お出かけのお時間でございますが・・・」

純ちゃんはそのようなふうにおどけた口調で、私の心と体の緊張をほぐしてくれた。

お昼の食事のはずが、お昼の時間をかなり過ぎてしまったけれど、純ちゃんは、ニコニコと笑顔で、私の手を握りながら歩いて、ホテルからさほど遠くない場所にあるレストランに案内してくれた。

その、純ちゃんの横顔があまりにも美しく、私は、又、胸が苦しくなるほど、嬉しさと、幸せな想いと緊張した心が・・・

普通なら、この時間は、お店の営業時間過ぎているのだろうか・・・

「準備中」の看板が出ていた！

純ちゃんは、そんな事も気にもせずに、扉を開けて店の中へ私を案内してくれた、午後の光が眩しいほどの街の空気とは別世界の静けさがそこにはあった。

『今日一日だけは、僕の奥さんなのだから、ちゃんと、腕を取り、歩こうよ！』

『いつか、本当に僕の奥さんになった時の練習だと思えばいいよ！』

そっと、大胆に、私の耳元で、囁いた。

私はもう、声も出ないほどの緊張と感情の昂ぶりで、倒れてしまうのではないかと思うほどの状態だった。

純ちゃんはゆっくり歩いてくれているのが分かるけれど、私はどうしても足がもつれてしまい、上手く歩けない！

やっと、案内されたテーブルに着き、ウェイターさんがほんのすこしの時間、私たちから離れた瞬間、純ちゃんは、私の手にキスをして、微笑んだ！

純ちゃんの私に対しての接し方が大胆で、今までと違う事が私を益々緊張させて、私の取るべき態度に戸惑いながらも、幸せな想いは胸を高鳴らせて苦しいほどだった。

やはり、そこには若く端正で、はつらつとして健康な男性の姿の純ちゃんがいた。

(十九)

お店の広さは小さめだけれど、ほど良い空間が広がる、センスの良いヨーロッパ的な雰囲気を取り入れたインテリアが、落ち着いた色彩で、適当に光を抑えていて気分の良い雰囲気は少しだけ私の気持ちを楽にしてくれた。

私たち以外は、お客さんがいない！、静かで他人に対して気兼ねする事の無い店内は、純ちゃんと私だけの空間！

低く抑え気味に話す声だけが広がって行った、もっとも、殆どは純ちゃんが話し、私はあいづちを打つ程度の会話で、たぶん、純ちゃんは、こんな私が不満だったろうと思う・・・

けれど、私には不慣れな場所で、純ちゃんとのデートを出来る場所は、いつも私の家か、公園のような落ち着いた、広い場所！そして一番多く、ふたりで過ごせたのは、私の入院していた病室、確かに、体調が良くて、小旅行として日帰りのドライブも一～二時間で行ける近い場所だった。

それも、渋滞時間を避けた平日に純ちゃんの仕事がない日に出かけていた。

そんな時の会話もたいていは純ちゃんが話し、私は聴く側にいる事が多かった、私はそんな情熱的に話す純ちゃんの姿がとても大好きで幸せなひと時だった。

いつだったか純ちゃんは何気なく言った一言を思い出していた・・・

「カコの夢を僕に話してくれないか？」

「僕はカコがどんな夢を持っているのか聴いてみたい！」

「その夢に向かってカコと僕とふたりで頑張るんだよ！」

そんな話をしたのは、もう、ずい分と昔になってしまったように感じた。

食事の前に、純ちゃんから、何気なく聴いた事だったが・・・

「ホテルで、カコがよく眠っていたので、予約時間をずらして貰ったよ！」

「店が準備時間になってしまうけれど、心良く、引き受けてくれたのだよ！」

そう言いながら、純ちゃんは、かなり空腹を我慢していたようで、思わず、お腹の虫が鳴いていた！

「ゴメンナサイね、いつも、私の我儘につき合わせてしまい！」

「これでは、純ちゃんの奥さんの役が務まらないはね！」

と言おうとして、私は言葉を飲み込んだ！

ふたりでの食事はランチコースメニューだったが、私は、正直、緊張していたのと体調が少し変だった事で、出てきたお料理の半分も食べれずに、申し訳ない思いで、純ちゃんに食べてもらった。

最後のデザートのアイスクリュームは美味しく頂き、やっと、純ちゃんの安心した笑顔を見る事が出来た。

食事が済んで、ゆっくりと歩いてホテルまで戻って、何をするでもなく、時間だけは過ぎていたが、純ちゃんが突然、私の手を取り・・・

「ちょっとだけ、僕とダンスをして！」

「カコは僕にからだを預けるだけでいいから・・・」

「疲れないように、僕に寄り添っていてくれればいいよ！」

そう言って、ダウンロードして来ていた音楽を、イヤホーンの片方を私の耳に優しくつけてくれて、私の両手を静かに自分の肩に回してくれて・・・

あの懐かしい曲『she』を純ちゃんのリードに合わせて何度も踊った。

ダンスの後、私ひとりをベットで休ませてくれて、純ちゃんは少しの時間、ベットの脇にいて、アメリカでの生活の事を少しだけ話して、照れながら、純ちゃんは、英語の台詞を言って聞かせてくれて、私も、ほんの少しだけ、理解出来たけれど元々、英語に通じていたわけではない、短大時代に少しだけ、英会話を勉強したが殆ど身につけてはいなかった。

その事を思っただけでも、純ちゃんの頑張りは、本当に凄いと、改めて感動し、尊敬していた。

夕食は、軽い物を部屋に届けて貰い、ふたりで、ワインでカンパイしたが、私はグラスに口をつけただけで、飲むことは出来なかった。

シャワーをそれぞれが済ませて、私は髪を乾かして終わって、イスを立った時、いきなり私を抱き上げて、ベットに運んでくれた！

私は、一緒に、ホテルに泊まるわけだから、ある意味、覚悟はしていた事だったけれど！
純ちゃんは、私をベットに寝かせてから、静かに、私を引き寄せて自分の胸の中へ招き入れた！

そして、私に、唇を重ねて、キスを、何度も・・・

でも、それ以上の事はせずに、私を抱き寄せただけで・・・

(二十)

しばらくはふたり、みつめ合いながら、時には彼の唇が私の唇を覆い包み込んで長いキスをして、彼は私の体のすべてを胸の中で抱きしめながらも・・・

純ちゃんは、私に対して、それ以上の行為はせずに、抱きしめて、私の苦しいほどの息遣いに・・・

彼の愛情表現も健康的な欲望も抑えているように、一瞬、苦しげな厳しい顔になって、静かに、私から離れて行った。

そして、まるで、嘘のような、冗談のような言葉で！

「姫！、もうしわけございません！」

「大変失礼な事を致しました！」

「この上はどのようなご処分を受けましても・・・」

「甘んじて、お受けいたしますので、・・・」

「どうぞ、充分なご処置を、お授けくださいませ！」

そう言った顔が、可笑しくもあり、切なくもあり、私は、どんな言葉で返事すればよいのか？

世間で言う、三十七歳、男盛りの健康な肉体の純ちゃんのこのようなしぐさは、すべて、私の体を気づかう愛情の深さだと、私は分かっていたから、こんな時、切なさど申し訳ない気持ちでつらかった。

私は純ちゃんにどう接し、話せば良いのか、とっさの言葉も考えも浮かんでこないふたりのぎこちない空気だけが残った。

その時、もう二度とこんな辛い思いを純ちゃんにさせてはいけない！私は固く決心した！、どんな事をして、健康な体になって、純ちゃんの本当のお嫁さんになり、私のすべてを捧げたい！！

『何の気遣いも無く愛し合えるふたりになりたい！』

その願いが叶う時は、きっと、純ちゃんのアメリカから帰国した時なのだと、純ちゃんの心に添う事が出来るように私、頑張るからね！

『純ちゃん、その時まで、待っていてね！』

そう、心で、約束した時、不思議なほど、純ちゃんから、力強い元気さが私に伝わって来た、そんな気持ちがして、心も体も強くなったように感じた！

次の日、私を家に送り届けてから、純ちゃんはひとりで、アメリカへ旅立った。

アメリカ合衆国、ロスアンゼルスは、初めての地であっても、純輔は観光などするどころではなかった。

ロスについて直ぐに、緊張の続く中で、二次、三次と、オーディションが進み、純輔は幸運にも最終のオーディションにも、合格出来た。

映画の主役ではないが、とても重要な役を引き受ける事になった。

ハリウッド映画「遠い祖国」は、ある、有名な監督のもとで、多国籍の俳優が出演する作品だ！

主役は、日本からアメリカへの移民2世の女性と白人男性とのラブロマンスを軸に、太平洋戦争によって愛を引き裂かれる苦難の日々を描くものだった。

「李 純輔」が演じるのは、主役の女性の兄の役だった。

子供時代は、在米日本人の子供が演じ、純輔は太平洋戦争前のボストンで大学に通う

大学生からの出演だった。

三十七歳の純輔ではあったが、さほど気にならない大学生の姿であった。

もちろん、その頃の日本の大学生のように学生服を着るわけではないので、一九三〇年頃のアメリカの大学生の生活を描き、大学を卒業し、父が営む、工場を継ぎながら、戦争によって、強制収容所での暮らしで、家族を守るために、自分の考えや思想とは

裏腹な生き方を強いられて、アメリカ人として、戦場に向かい、又、間接的ではあるが、長崎に落とされた核爆弾の移送にも関わり、その事で多くの同じ民族である日本人を

殺してしまった事を苦しみながら、アメリカで戦後を生きる人間を演じた。

精神的にも本当のアメリカ人としてもなじめず、日本人としても生きられない事の苦しみ、戦争での死への慄然とした恐怖や心の葛藤、混乱する精神状態を描く、二十代から、五十代までを演じた、純ちゃんの素晴らしい演技は、映画の公開前から、アメリカは元より、日本のマスコミの話題になって広く伝わって行った。

(二十一)

純輔の出演する映画『遠い祖国』の企画進行がとても特殊な進め方だった。

ハリウッド映画ではとても珍しい事だけれど、純輔はオーディションに受かって直ぐに出演契約を交わし、その後直ぐに撮影が始まるという、異例な事つづきで、当然の事ながら、純輔は日本へ一時帰国する事も出来ずに、1年以上、準備期間や撮影が続き、とにかく過密スケジュールで日本へ帰国する事が出来なかった。

言葉や生活習慣そして、映画撮影の進め方の違いに戸惑いながら、その繊細な精神性から、人好きあいの苦手な、純輔は、いくつもの、神経ハゲが出来て、神経性の胃炎を何度も繰り返しながらも、強い精神力と集中力で乗り越えて行った。

演技者として素晴らしさと人間性を認められて、少しずつ周りの人たちが味方になってくれる事も増えて、長い一年の日々に最善を尽して、純輔が出演する場面の撮影が終了して、ひとまずは帰国する事が出来た。

帰国しても、一年以上、日本での仕事をやっていなかった分、日本で努力をしなければならず、又、ハリウッド映画に挑戦した事を、マスコミにもかなり知られて行き、インタビューなどを受ける回数もだんだん多く成って行き、過密なスケジュールの日々は、さすがの純ちゃんも体力、気力共にぎりぎりの状態だった。

純ちゃんの帰国を待ちわびていた私は、純ちゃんのいない間に、自分ではとても頑張ったと思うけれど、相変わらずの体力のない、やせっぽちの体だった。

純ちゃんがアメリカに行く前に心で約束した事！

「本当の純ちゃんのお嫁さんになる為の努力！！！」

約束を守るために、プールへ通い、プールの中を歩いたり、自宅の近くをゆっくりと走ってみたり、時には母とふたりで電車で高麗まで行き、日和田山を少し登った、胸の苦しさも母がとても嬉しそうな笑顔と「もう少しよ、頑張って！」と、かけてくれるひと言が私を勇気づけてくれた。

私は、幼い頃から病弱で母に心配ばかりかけて来た、それが、純ちゃんに恋した事で、どんな事でも、前向きに物事を考えられる娘の姿が輝いて見えると言って、父も母も喜んでくれていた。

母はどんなに自分が大変な時も明るく笑顔でいてくれる人だ！

私は本当によく運動をした、又、基礎体力のつく、漢方薬を飲み、食事に気をつけて、健康に良いと考えられる事すべてにトライして頑張ってきた一年間だった。

だが、私の体は、ひどく免疫力が低下している為に、紫外線にとっても弱くて、完全防備の厚化粧をしての外出であっても、時には、紫外線火傷をして、特に顔が、お岩さん状態になって辛い事も何度かあった。

けれど、辛く、苦しい時はいつも、純ちゃんの頑張る姿を思いながら、切り抜ける自分が不思議なくらいにどんな事も耐えられた。

その成果が出て来たのか、食事少しは多く食べられるし、体調が悪くて寝込む事も少なくなって来ていたと自分では思っていた。

純ちゃんは帰国してからも、電話で話す以外には会えずに、テレビの芸能ニュースなどで、インタビューを受けている姿を観られるだけだった。

けれど、やはり、純ちゃんの素敵さと共に、健康的で男性としての魅力と共に男とし

ての本能を垣間見る瞬間が、何度もあった。

美しい女性インタビュアーとの会話は、私といる時の表情とは少し違っていると、どうしても感じてしまう自分の惨めさとジェラシーを感じる自分の狭い心が悲しかった。おそらく純ちゃん自身が気づいてはいない、男としての本能がそうさせる動きや姿なのだろう・・・

純ちゃんの、ほんの一瞬だが、野獣のような目を輝かせて、私には見せた事のない輝く瞳を見た時、女としての性を嫌と言うほど感じてしまう・・・

(二十二)

純ちゃんの少年のような無防備な眼差しと大人の男の本能がよび覚ます感情から！私は純ちゃんの心の中をのぞいてしまった気がした。

純ちゃんは、自分自身も戸惑いを感じても立場上なれぬ日常に追われる、ともすれば自分を見失うほどの精神状態に必死で仕事をこなしていた。

時には疲労感から、私の知っていた優しい彼の姿ではなくなったような厳しい顔になる、忙しくスケジュールに追われた生活だった。

そんな状況の中でも私に逢う時間をなんとか作ってくれて、我が家に来てくれて、両親に帰国の挨拶をしてくれた。

いちだんと素敵さ、かっこ良さ、洗練された人間として、やはり、純ちゃんを目の前で見て、言葉が出ないほど心が弾んで、感情が昂ぶる想いで嬉しかったけれど、一年ぶりに逢えたふたりにとってあまりにも切ないほどの短い時間だった。

ほんの一年前まで国内で、さほど有名でなかった目立たない映画俳優が、ハリウッド映画に出演して、しかも、準主役級であることが、芸能界やマスコミがほおって置かなかった、某、国営放送までが純ちゃんを取材して、ミニ特集を組むほどの扱いだったから、そう言った点からも、私の存在は隠された立場になるしかなかった。

まだ、純ちゃんが出演した、ハリウッド映画「遠い祖国」は日本での公開も決まっていはいない現実とのギャップが、純ちゃんの忙しさと、精神的な苦痛だけが、攻めているように、純ちゃんの姿を見ていなくても辛さが分かって重くなる心が苦しかった。

逢えないけれど純ちゃんとの電話だけを頼りに、ひと月が過ぎた頃、やっと、純ちゃんから、デートのお誘いの連絡があって、アメリカへ出発する前の日に二人で泊まったホテルへタクシーで駆けつけたが、まだ、純ちゃんは、来ていなかった、私は、ひとりで、待ち合わせ場所である、このホテルのティールームで、待っていても、純ちゃんは、中々、来てくれなかった。

どの位の時間が過ぎたのだろうか、ひとりで不安な気持ちと、逢える喜びの感情が複雑に絡み合ってくる！

芸能界で、知られる存在になった純ちゃんのキラキラ輝く姿はやはり何処かで、私の知らない人間に成ってしまったような思いが私の心の片隅でもやもやと曇らせて行く・・・

どう頑張っても、純ちゃんのような健康で元気な心や体にはなれなかった悔しさと惨めさもまた、不安感を大きくして行った。

突然、静かな音楽が流れる店内に私を呼ぶアナウンスが流れて、私は、急ぎ、ホテルのフロントに行った、私宛の純ちゃんからのメッセージが届いていた。

「急に仕事が入ってしまい、時間が少し掛かりそうなので・・・」

「予約してある、この前の部屋で、待っていて・・・」

「すこし、部屋で休んでいて欲しいと書かれていた！」

私は確かに、精神的に疲れていた！

純ちゃんからの突然の呼び出しで慌てて家を出て来た事や待っている時間の中で、いろんな思いに至って、緊張感からの疲れや不安感が、私をすこし体調を悪くしていた。純ちゃんの何気ないこうした気使いが、なお辛く心穏やかではいられない惨めさをつのらせて悲しい気持ちになる！

いつか見たあの、美人インタビュアーへ向けられた純ちゃんの無防備で本能的な男を魅せつける姿や感情の純ちゃんが恨めしいと思うし、あの女性に嫉妬している自分が嫌でたまらない思いにしていった。

いつしか、私はベットに横になり眠ってしまったのだろうか？

何処か暗闇の中をひとりで歩いていて、遠くで、純ちゃんの声が微かに聴こえる！

(二十三)

体が冷えて寒い、全身が硬直しているように動かないもどかしさで、私は純ちゃんを必死で追い求めても届かない・・・

私を呼んでいるような声がしても私には純ちゃんの姿が見えない、一生懸命に眼をあけようとしても、まぶたが重くて眼が開かないし、身動きが出来ない！

悲しさで胸が苦しくて、痛い！

やっとの思いで声を出して純ちゃんを呼んだその時に、あれほど体が冷たく、重く、身動きの出来なかったからだが少し暖かくなったように私の唇がほのかなぬくもりを感じて私は静かに眼を開けたと同時に、純ちゃんの香しきにおいに包まれて、私と彼！純ちゃんの唇が重なりあった・・・

そして、ふたりの、長い、甘いキスがつづいた。

純ちゃんは優しく私を抱き上げて、ソファーまで運んでくれて、座らせてくれた。

そしておでこに、キスをしてくれた！

私は、立ち上がろうとしても、すぐに、抱きしめられて、動けない！

耳元で、優しく囁く！

「ゴメンね、長く待たせてしまって！」

「辛かっただろうね！」

「僕も、本当は仕事に中々集中できなくて、困ったよ！」

「ああ～やっど、逢えたね！」

『もう一度、抱きしめさせて！！！！』

そう言って、しばらく、私を抱きしめたままで離そうとしなかった。

私はすこし苦しかった！、純ちゃんの力強さと、自分の心の中で喜びと混乱する感情が、揺れ動いて乱れた！

「今日、すべてをゆだねよう！」

そう思った時、純ちゃんは、私をソファーに座らせた隣に座った。

私の両手を取りながら、何から話せばいいんだろうね・・・

あまりにも多くの事があったし、長かったアメリカでの撮影で貴重な多くの体験をして、忙しすぎて、今、私は自分が誰なのか分からないような気持ちがするよ！

正直に言えば、とても、混乱している精神状態なんだよ！、誰を信じてよいのか分か

らない時があるんだ、そんな時、とても「カコ」に逢いたくて、そばにいてほしいけれど、現実には、僕の方がカコに逢えずにいるんだよね！

「カコ、本当にゴメンね！」

「いちばん大切なカコを遠ざける事になってしまい！」

「許せないだろう・・・」

「ぜんぶ、僕が悪いんだよ！」

「カコを悲しい思いにさせた事！」

「許して、せめて、今だけは！」

「今、僕は、どうかしてるんだね！」

「誰かに操られている人形のようなだよ！」

「本来の自分を取り戻すためにも！」

「今度の企画を引き受ける事にしたんだ！」

そう言いながら、私の肩を抱き寄せて、話し始めた！

又、直ぐに、アラスカに行く事になってね、今度のアラスカの取材は二ヶ月以上になると思う！

今度は、高津さんや伊達さんの事！アラスカの大自然の映像をもっと大胆に取材してとその世界に住んでいる人たちについて、この前のアラスカの取材企画を、特別番組として、深く掘り下げた「大自然の中で生きる人間がテーマ」で、もっと大きく広く取り上げる事が本格的に決まって、僕はその番組のキャスター兼プロデューサーを任された、とても大きな企画、特別番組なんだ！

やはり、純ちゃんは仕事が好きなんだ！

私が知る純ちゃんとはちがう、人間性が大きく成長したのだろうか、何処かで、今までの俳優としての価値観だけでは満足出来ない、感動と探究心がそうさせているのだろうか・・・

アメリカでの体験とその後の立場が純ちゃんの別の感性を目覚めさせて、あれほど、俳優としての生き方にこだわっていたけれど、何かが純ちゃんの中で変わったのだと思った。

私は純ちゃんのひと回り大きくなった、男の輝きに抱かれながら、私との距離を感じずにはられない、寂しさと悲しみが・・・

(二十四)

今、純ちゃんは、新たに飛躍して飛び立とうとしている！

たぶん、自分の中の秘められた可能性を確かめてみたいのだろう、男として、健康な体でエネルギーに満ちている今、一生の中で一番能力を発揮できる時期だろうと考えた時、体の弱い私がそばに付いては、純ちゃんが気の毒なだけだと強く感じた。

『今日、私のすべてをゆだねて！』

『大切な思い出をつくり、私の大切な宝物に出来る日にしよう・・・』

『この日が始まりで、終りであっても！』

私は、密かに思った。

「純ちゃん、今日は？」

そう決心はしたけれど、私が言葉に出来るのは、そこまでだった。

その時すでに、純ちゃんはもう、仕事の方に気持ちを切り替えていたのか・・・

「今夜も、人と会う約束があって、長くられないだよ！」

「カコには、どうお詫びしたらいいんだろう・・・」

「こんど、アラスカから帰ったら、結婚式をあげよう！」

「僕は、仕事関係の人には知らせないから！」

「君のご両親と友人の前で！」

「君への愛を誓うよ！」

「式場を決めておいてね！」

「僕は、カコとカコのご家族だけに誓えばいいんだ！」

純ちゃんはあえて、自分の家族の事を言わないようで、私はすこし気になったが、あらためて、ご家族の事を聞いてはいけない気がして、黙ってしまった。

早めの夕食をホテルの部屋でふたりでして、純ちゃんは忙しく、タクシーで家まで私を送って来てくれたが、時間が無くて、両親とは、玄関で挨拶を交わしただけで、慌てて、帰ってしまった。

忙しすぎる純ちゃんの体が心配で気になって、不安でたまらない！だから、わざと純ちゃんには、私は今とても元気になったから大丈夫！、私から何処へでもたずねて行けるから・・・

「もちろん、東京の何処へでも行けるのよ！」

「なんだったら、ふたりで旅行だって出来るんだから・・・」

「アラスカへだって、私、ついて行けるくらい元気よ！」

そう言って、淳ちゃんを安心させてあげたかった、その言葉を聞いて、純ちゃんは、本当だね、全部の日程は無理でも、アンカレジと一緒に行けたら最高だね・・・

私のから元気な嘘を気づいているようでもあったけれど、純ちゃんの素直に喜ぶ声が弾んでいたことで、私は嘘をついてしまった事が、なんだか申し訳なさと、後ろめたい思いがした。

けれど、「現実の私は難しい状態だった！」

私には、両親にさえ知らせていない、秘密があった！

胸の痛みが気になって、定期健診の時に胸部検査をした、その結果は、私から、すべての望みを奪ってしまう、現実があった。

現実には、私は、結婚を夢見れるほどの時間も心の余裕さえなかった。

あれほど、この私を、大切にしてくれて、愛してくれる純ちゃんに、そんな残酷な私の現実を話せない！

私はどうすればいいのだろうか、不安だけが大きく広がる絶望だけが、私の目の前にあった。

けれど、私は常にこの事を覚悟していたような、不思議なほど気持ちは落ち着いて、自分がこれからどうすれば良いのか心で探し当てようとしている。

特に、純ちゃんの前にいる時は、元気で本当に健康な体なのだと思えて、純ちゃんが私に望む事すべてが叶うようにさえ思えて体がとても軽く気分も良くて幸せでいられると感じられた。

これから、純ちゃんが旅立つ、アラスカがどれほどの遠い距離で、私には見知らぬ地であっても、私の眼には見えているような錯覚さえして、ほんの一瞬、純ちゃんとふたりで深い森の中を歩き、白夜の光がふりそそいだ気がした・・・

(二十五)

純ちゃんは、本当に申し訳ないほど良く私に気づかってくれた、やる事の多い忙しい身で、アラスカ取材へ出発までの日々、今の自分の立場やの仕事を考えると私の事など思う時間さえないはずなのに、わずかの時間をつくっては電話をして来てくれた。俳優として引き受けた映画の出演をこなし、時にはハリウッドでの体験を雑誌への文章記事を書きと！本当は寝る時間も無いほどの忙しさだった。

そんな中で、純ちゃんから「カコ、時間が出来た！今から逢えないか？」と連絡を受けると、それがわずかな時間であっても私は急ぎ出かけて行き、純ちゃんとふたりでデートを楽しんだ！

たとえ、それが、お茶を飲むだけの時間であっても、今のふたりにはとても大切な時間であって、幸せなひと時でもあった。

そして、純ちゃんは、アラスカへ旅立って行った。

今度のアラスカの旅は多人数の取材チームであって、取材に使える予算もかなり高額で満足出来る額を用意された、それだけでも、今の純ちゃんの立場が変わったことを示していた。

純ちゃんは心の中で、私を気にしながらも、今はこのアラスカの取材企画に気持ちを集中させての出発だった。

その事が、ふたりの運命の大きな分岐点だとはお互いがまだ知らずに、又、再会を喜び、純ちゃんに逢えると私は信じたかった。

ふたりの運命は神だけが知る、特権を持つものなのだろうか！

その時の私は底知れぬ不安におびえながらも、わずかな期待と、望みを持ち、純ちゃんに出来るだけ明るい笑顔で接し成田空港から見送った。

ただ、私だけが、残酷な運命にさらされているのかも知れないと思いながら・・・

純ちゃんは、アラスカについて直ぐに、敬愛する高津さんに、そして伊達さんに会い、取材計画を話して、今度こそ、アラスカ最北の地！

「シシュマレフ」へ行く事を願い出た。

高津さんは、細かな予定は組まずに、自然の成り行きを見届けた行動をする事を進めてくれた。

まずは、高津さんの写真撮影のカメラクルー達と、同行する事になって、今は6月のはじめなので、アラスカ南部のグレイシャーベイ国立公園の巨大氷河や海の動物の写真撮影する高津さんの姿の取材から始まった。

純ちゃんはアラスカのすべてを撮影したいと思い込むほどの熱の入った、意気込みで、この取材企画は始まった。

何しろ広い、広い、アラスカの大自然の事、セスナ機がタクシー代わりに、目的地に運んでくれる。

純輔は、一瞬、一瞬が、新鮮で、感動的な体験の連続だった。

あの有名な、ラッコにも出会い！

ザトウクジラが潮を吹き、巨大な体で海面高く飛ぶ姿は、純輔の体のすべての血が逆流するほどの感激だ！

とにかく、取材チームはみな、我を忘れての興奮した感情を抑えられない！、連日の高津さんの大自然をカメラで切り取る映像美を追う取材に明け暮れて、興奮状態がつ

づいた。

そして、好天の日と高津さんの見定めた時、巨大な、マッキンリー登山のベースキャンプに、登山隊を尋ねて行き、次々と、マッキンリーの山頂を目指して歩き出す姿を追いながら・・・

ふと、複雑な感情になって、思い出していた、面識こそ無かったけれど、純輔の少年の日に読んだ、冒険記を！、この場所から、あの植村直巳さん、山田昇さんが真冬のある日、この場所から、一歩踏み出して、そして帰っては来なかった事を思い出した。次々と姿を現す、このあまりにも美しい！信じがたいほどの緊張感みなぎる風景！山や切り立った岩峰、そして白銀の世界を眼の前にして、言葉に出来ない感動の連続で鳥肌が何度も立つほど興奮した感情だった！！

人はなぜ、山へ向かうのかを少しだけ理解できた気がした。

(二十六)

純輔と取材チームは広大なアラスカの大自然の中で毎日感動の連続、時には大自然の驚異に出会いながらも取材は大満足してその後の取材も進んでいた。

そしてあの、日本人女性！、たったひとりで豪快に勇敢に、アラスカの大地のひとつの生き物として、大自然に溶け込んだ生き方をしている場所へセスナ機が純輔たちを運んでくれた。

セスナ機が飛びたつのも、着地するのも、湖や川の中がほとんどで、アラスカのセスナ機は、水陸両方使えるように、タイヤとスキー板の大きくしたような物が着いている。その女性は、もう、五十歳は過ぎているだろうか、深い森の中にたった一軒、粗末な家に住んでいた。

私たちが、訪れる事は、すでに無線で知らせていたようで、セスナ機が河に着水して、ただ、粗く削った丸太を何本か並べただけの粗末な栈橋にはもう、両手を大きく振って、私たちを迎えて、歓迎してくれた。

このアラスカのうす暗く深い森をひとりで切り開いた凄い女性だ！20数年前に、まずは森林伐採の許可をとり、一本、一本、自分で木を切り、一間とキッチンだけの小屋を建て、そこに住み始めたのだそうだ。

アラスカの森は、普通に街で生活している人間には、想像もつかないほどの過酷な大自然の驚異がある！六月だというのに、一日のうちに四季があるほどの天候の変化で、現に純輔たちは、何度も天候の急変に脅威を感じた。

彼女は今、五十歳を過ぎていると思うけれど、これまでに、何度も、何度も、命の危険を感じた事があつたらうかと思う、電話も通じない、ましてや、滅多に人に出会う事の無い原生林の森の中で、ビックベアーが襲い来る危険やそのほかの獣がたくさんいる中で、一瞬の気を許す事も出来ない緊張感が必要だ！

ある時は、夜寝ていて、この家を狼や熊が襲う「がりがり」と爪を立てる音に目覚める時の恐怖は、さすがの私も恐怖感と緊張感で、銃持った手や体の震えが止まらなかったと笑いながら話してくれた。

大怪我をしても、誰も助けてはくれないので、怪我や病気は自然に治るのを待つしかなく、ただひとり不安に耐えて、寝ているしかない日々も何度も体験し、あつたと、にこやかに平然と話す、あまりにも毅然とした姿に圧倒されるような気迫さえを感じて、純輔は人の生きるエネルギーの強さがとても美しく感じた。

けれど、この女性、「三島美佐子」さんに、純輔はこの取材旅行の最後に大きな関わりを持つ大事件あう事になるとは、その時は考えもつかないほど、満足で感動的な時間だった、それまで純輔の生きた世界で知る人々の中でもっとも刺激的で、魅力ある女性だった。

純輔たち、アラスカ取材チームは、すこしの時間も惜しむように、高津さんを中心に追いながら、アラスカ中をセスナ機で飛び回り、次々と、素晴らしい映像を撮影し、取材して、時間があまりにも早く過ぎて行った。

私、カコは、純ちゃんを成田に送ったその足で、両親にも、誰にも、何も言わずに、ひとりで病院へ入って行った。

これから、どうすれば良いのか、担当医との今後の治療方法について相談があつた。もう、だいぶ前から、右の胸が痛くて、時には腕を上げるのさえも辛い時があつた。

何度も、こんな症状があつて、その度に、乳がんの検査をしても、見つけることが出来なかった、ただ、私は、赤ちゃんを産んだ経験が無いのになぜか、いつも、「慢性の乳腺炎」だと診断されて、治療の方法がないと言われるのが不思議だった。

「ホルモンバランスがくずれているから、痛いのでしょうか！」

いつも、ドクターにはそんな風に言われては、痛さと不安に耐えて来たのだが・・・

(二十七)

純ちゃんとの恋！、純ちゃんに愛されている！、その思いが、私の体に変化が現わしてくれていた、以前の私の体調を考えた時、私は不思議なほど、元気になれたと思っていた。

とても気分の良い日が多くて、胸の痛みもさほど気にならなかった事も事実だった。けれど、ある日、とても胸が苦しくて、痛さが今までとは違うように感じて、先日、純ちゃんにも、家族にも、誰にも秘密で、胸の検査をして、分かった事は、乳がんである事を診断された。

純ちゃんがハリウッドから帰って、逢いたい想いと不安がごちゃ混ぜの揺れ動く中で、過ごしていても、純ちゃんへの思いが強い分だけ胸の痛さにも耐えられたし、乳がんと診断された事も忘れられた気がしていた。

純ちゃんのアラスカ行きを見送った後の病院で改めて精密検査をして、その結果をきく私は、担当医の説明をまるで、他人事のように、何の感情も無いままに聞き、ドクターの言葉だけが自分の体を通り抜けて行くような気がしていた。

これから、自分の身に起きる、重大な事だとは、すこしも考えが行かなかった気がする！ましてや、純ちゃんはハリウッドから日本へ帰国して、突然、注目された忙しい身になり、世間から見られる特別な存在になって、その事が、少なからず、私は行動や感情が制限された日々がつづいて、自分の体の事を考えないように、その不安を遠ざけていた気がする。

今、私はたったひとり！、取り残された気持ちと、純ちゃんのいる世界が、あまりにも遠くなってしまったように思えて、むしろ、病気の事よりも、純ちゃんとの遠く離れてしまったと感じる隔たりの大きさが悲しかった。

幸いにも、まだ乳がんは、手術によって、治せると医師は言ったけれど、私は、今、自分の中で時間が止まってしまった気がする、なぜか、病気の事は深刻に考えられず、悩む事もせず、この乳がんと言う病気は自然な状態で何処かに消えてしまうとさえ思えるのだった。

純ちゃんは、アンカレジやフェアバンク스에滞在している時だけ、電話してきた！

『ハイ、ハニー、元気にしているのかな？』

かなり、興奮しているのか、とんでもなく、上機嫌で話す声が弾んでいた！

いつもながら、一方的に話しては、私の声が聞きたいから、何か言って！と・・・

でも、いつだって、純ちゃんは、自分が伝えたい事がたくさんあるのよね！、仕事での感動が大きくて・・・

私は益々、寂しさと不安が募るばかり・・・

『私！純ちゃんにとっても逢いたいのに！』

『今すぐに、飛んで、逢いに行きたいのに！』

そう伝えたいけれど、言葉が体のどこかで固まってしまったように出てこなくて悲しかった。

だから、私の口から出る言葉、純ちゃんに伝える言葉は、無理に強がって、元気なふりをする！ぎこちないまでに弱さを悟られまいと・・・

「私は益々元気で、もっと、健康になる為にね！」

「ビューティー、ヨガを始めたのよ！」

「純ちゃんがアラスカから、帰国できる頃にはね！」

「見違っちゃうほど、綺麗になっているわ～」

「成田で逢った時、驚かないでね！」

そんな心にも無い嘘を、声を弾ませて言いながら、突然涙が流れて止まらなくなって・・・

純ちゃんは、私との電話を切ってから、どんなふう感じたかしら？今は純ちゃんにとって、すべてが大切な時、純ちゃんに絶対、私の病気の事を気づかれないようにしなくてははいけないのだから！

純ちゃんの仕事に余計な煩わしさがあってはいけない！今が一番の勝負の時ですもの・・・

けれど、私の胸の痛みは激しく、意識さえもが薄れて行く・

見知らぬ街で私は倒れても、なお、純ちゃんのあの微笑に逢いたい！！！！

「悲しい愛」

貴方の瞳に映る愛は

こんな悲しい愛でしょうか

あの微笑に酔いしれたあの頃

ただ愛してると言って

貴方がいつもそばにいてくれた頃

運命は残酷に静かに密やかに

悲しい愛をもって来る

ただ貴方に逢いたくて

<下巻につづきます>